

テレビもコンビニもない山奥で、自然体験合宿

NPO法人自然体験村「虫夢（むーむー）ところ昆虫の家」 （北見市常呂町）

「ピンは危ないから十分注意して」子供たちはミヤマアゲハチョウの胴体の部分に、恐る恐るピンを刺す。チョウは一瞬身体を震わせると、その動きを止めた。「今度は、羽を広げてやります。羽はそっと扱ってね」

北見市常呂町、NPO法人自然体験村「虫夢（むーむー）ところ昆虫の家」（以下 昆虫の家）が主催する自然体験合宿「いきいきオホーツク自然体験村」の昆虫標本を作る時間である。子供たちに指導しているのは、北海道昆虫同好会の副会長を務める本間定利さん。

夏休み期間を利用して 14 日間の自然体験合宿を、同町吉野地区にある宿泊施設で行うといったプログラム。ここにはテレビはないし、携帯電話も繋がらない。もちろん近くにコンビニなどもない。参加している子供たちは全部で 22 人。道内は 5 人だけで、他は埼玉県や東京都、千葉県、京都府などから来ている。

その子供たちは、本間さんの指示に頷きながらチョウを標本台に固定していた。東京から参加しているという小学校 4 年の女子生徒は、「友達に誘われてこの体験村に参加しました。バレエや英語なんかも習っています

が、これの方が楽しいです」とチョウを押さえながら無邪気に笑う。



本間さんの指導を受けて、昆虫標本を作る子供たち

■ その道の達人たちを講師に

今回の自然体験合宿を企画・コーディネートをした千葉公三さんは、「昆虫の家」に長年関わってきた会員であり、北海道昆虫同好会事務局長の肩書きも持つ。

「この昆虫標本作りにしても、昆虫同好会の副会長に来てもらっていますし、星空観測会や木登り体験、昆虫採集などの企画でも講師はその道で名の知られている人をお呼びしているのです」と千葉さん。

同合宿の期間は 2 週間。たくさんの企画を

立ててあるが、どれも内容の濃いものばかり。さらに、地元の人に協力してもらい「イモ掘り」をやらせてもらったり、棟上げ式の「餅まき」を見学させてもらったり、「子供たちには、いろいろな体験をしてもらいたい」と言う。

自然体験合宿はすべて同会員やボランティアの協力で行われており、常時4~5人のボランティアが手伝っている。その一人である北翔大学4年生の能代谷兼大さんは、「自分は、教職課程を取っていて、教育実習だけでは期間が短すぎると感じていましたので、こんな機会を探していました。そんなとき、ウチの大学の教授からここのボランティアを勧められました」と、その参加理由を語っていた。

■ 一人の情熱が、大勢の情熱に

「昆虫の家」は、1989年に元自衛官の滝沢始さん（故人）が、「自分は幼い頃に親を亡くし、親子の思い出がないので、そういった場所を作りたい」と、廃校になった吉野小学校を買い取ったことからスタートした。

吉野小学校は廃校になった後、養豚場となっていたが、それも閉鎖となり荒れ果てていた。滝沢さんは、自費で買い、一人でコツコツと施設を作り始めた。

その姿を見て、地域の人たちも協力を始めた。地元の建設業者をはじめ、北見や津別、札幌の人たちまでが昆虫の家の施設作りに参加した。

滝沢さんは1991年に亡くなったが、その志を継いだ地元の人たちが、ボランティア団体「虫夢の会」を組織して、この施設の管理・運営にあたった。1口5000円の会費で、その年には会員356人を数えた。無料で宿泊施設を開放すると共に、昆虫標本の展示室や五右衛門風呂、ホタルの池、吊り橋などすべて会員の手で作られ、年間7000人が利用していた。2001年からはNPO法人として組織体制を整備、自然体験活動の充実を図っている。

現在、年間10回ほど実施する「週末自然体験活動」（水中生物観察会、ヤマブドウ・コクワ採取、餅つき会など）や、夏休み期間を利用して14日間の自然体験合宿を行う「いきいきオホーツク自然体験村」が行われている。



「昆虫の家」の前庭にある池で遊ぶ子供たち

■ 子供たちに恐れられる

「赤鬼さん」と「青鬼さん」

「昆虫の家」には、名物の「おっちゃん」たちが何人かいる。その中で特に、「赤鬼」、「青鬼」と呼ばれている「おっちゃん」が子供たちに恐れられているという。

まず、「赤鬼」は同事務局長の若原和政さんである。いつも赤いツナギの作業服を着ているので、「赤」になった。「言うことをきかない子供は、もちろん叱りますよっ」。言葉遣いはいわゆる「浜言葉ふう」、これが子供たちにはキツク聞こえるのかもしれない。

「青鬼」の方は、昆虫の家の理事を務める忠津信征さん。常呂町で鉄工所を営んでいる。こちらは「青」のツナギ。「2週間ここに泊まって、自分たちで食事を作って食べるだけでも、子供たちには役に立つでしょうね。子供たちと一緒にいると、まるで自分の子供のように思えてきて」と忠津さんは目尻を下げる。



自然体験合宿の「いも掘り体験」(2010年7月29日)

自然体験に訪れた日の昼食は、イモ掘り体験で掘ってきたイモと食パンだけだった。それでも「赤鬼」と「青鬼」と子供たちと一緒に料理して、みんな嬉しそうに食べていた。

「怖いけど、本当は優しい」。昔は近所に必ずこんな「おっちゃん」たちがいたものだ…。

そんな「おっちゃん」とこの合宿について、以前に参加した子供の残した記述が、宿泊所の壁に貼られてあった。

苫小牧小学校6年(当時)の小橋来海さんが作った「虫夢ところ新聞」(2007年8月発行)である。苫小牧市のコンクールで入賞したというその新聞は、合宿の様子などを丁寧につづっていた。そのあとがきに、次のように書かれてある。

「私は、初め常呂町に行きたくありませんでした。虫は大嫌いだし、知らない人と一緒に14日間も過ごすなんて絶対に無理だと思いました。でも、赤オニさん青オニさんをはじめ、優しいスタッフの皆さんに励まされ頑張りました。仲良しもできたし楽しい14日間でした。テレビも携帯電話もコンビニもないけれど自然は一杯ありました。でも虫が大嫌い！！」

■ 連絡先

〒093-0335 北見市常呂町字吉野 137 番地
NPO法人虫夢(むーむー)ところ昆虫の家
代表 川上和則、事務局長 若原和政

TEL : 0152-57-2221 / FAX :

Email : wakahara@mu-mu-tokoro.jp

URL : <http://mu-mu-tokoro.jp>